備陽史探訪
第85号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(0849)53-6157

城郭研究部会調査報告

狐城異聞

出内博都

〝中世を読む〟という定例学習会で「備後古城記」の内容研究をとりあげて随分の歳月がながれた。たくさんある写本のなかで比較的内容が簡素な壇上本をテキストにした気軽な学習会であったが、県教委の調査による「広島県中世城館遺跡総合調査報告書」が出るようになって、単に古城記にある城のみでなく、当該地域にあるすべての城の研究へと発展し、いつしか現地調査が当り前のことのようになり、ここ一年で、参加者による山城調査はゆうに数十城を越えていると思う。

世羅郡世羅町神崎にある狐城、妙見山城の調査は、かなり紆余曲折があったので、その経過を報告する。場所については町教委に尋ねて一応確認し、七月二十一日五人のメンバーで、勢いよく早朝攻撃をかけた。

登り初めてから十分ぐらいで、やや平坦で細長い郭らしき地形に出会った。やがてたしかに堀切りとみられる人工地形を確認することができた。勇を鼓して更に登る。しかし、今までの山とは何か違った不安もよぎる。もう何かあってもよいころだと思うころに崩れかけた竪堀と帯郭らしき地形にであっただけで、やがて頂上に達した。だが、かなり広い山頂の何処にも、郭跡はおろか、人工の跡さえみえない。くたびれた五人は「狐城とはよくできた名称だ。うまく瞞されたか」という結論で徒労に終わった調査の失敗をジョークでごまかして山を下りた。

かっての木材搬出用の林道を車で登ったので、麓の集落からかなり離れている。今更確認のために下山するのも癪にさわる。変な心理が働いて「この報告書によれば、すく東隣に見える妙見山城というのがある。そう言ってみればあの山はたしかに形がよい。あれが妙見山かも知れない」誰言うとなしに衆議一決し、新しい行動が始まった（狐に騙されているお前らの判断はどうだろうね）。どこかで運命の悪魔はほくそえんでいたのだろうが、空腹をおさえて捜し廻ったが、正午近くになっても平坦な自然地形のみで人工の跡は見当たらない。〝腹がへっては戦にならぬ〟朝からの失敗を苦笑しながら昼食をとった。

昼食を終えて、複雑な気持ちで下山し、見晴らしのよい台地であたりを見回したら、どうも、今登ったら北に伸びた尾根の方が平坦面や段差が多いようにみえる。狐に瞞されている心理状態と言うのか、いつの間にか三度目の調査が始まった。あまり急峻ではないが、びっしり繁ったススキをかきわけての行動もかなりの重労働であった。鞍部をののぼりつめて尾根の裏側をみて驚いた。そこには何ヘクタールという開墾地が赤土の膚をさらしていた。とにかく頂上を確かめようと、尾根を縦走したがこれまた空振りであった。

麓へ降りて地元の人に聞いたら案の定、山が違っていた。狐城＝白狐は町教委の主事さんまで瞞したのか苦笑のうちに一日を終えた。しかし、これは全くの徒労ではなかった。最初の山が県の報告書にはないが、月ガ平城であることがわかった。城郭大系によれば「……今高野山城の西の押さえとして構築されたものであろう。円錐形状の山頂部を二段に削平して郭を設けているのみで、周囲の急斜面をそのままに防御の一面に組み込んだものと思える」とあり、どうも最初からあまり入念に整備されていなかったもののようであった。一日かけて一城は見たことになり、全くの空振りではなかった事に自己満足して、一日を終えた。

七月二十六日、雨模様の中を地元のKさんに確かめて、しっかりした情報をもって登山を開始した。小雨の中、雨具が汗をふくんで蒸し暑い……とにかく頂上に辿り着いた。確かに郭の跡である。早速、地形図のコピーをだして、雨に濡れるのをかばいながら調査を開始した。しばらくして「どうも、おかしい。郭の形が全く違う」こんな声があちこちからでた。雨は少しずつ勢いを増す。五人は少しとまどった。「また狐に瞞されたか」「この山は違う。別の城に違いない」など色々意見がでたが、とにかくこの位の雨に負けてはいられない。詳しく調べよう。かなり広いので、手分けをして調査することにした。とはいうものの、その日に限ってメジャーも記録用紙、画

板もない。目測と歩測で測るしかない。手許の資料の裏面に、雨ににじむ鉛筆でどうにか郭や堀切・竪堀などの輪郭ができた。紙がにじんで詳細は書けない。あとはお互いの目にしっかり焼き付けて置く以外にない。雨ににじむ紙を大事にもちかえり、にじんだ筆痕をたよりに原図を作り幾度かの修正をしたのが末尾の図である。雨の中の目測・歩測である。どこまで正確か、不安のうちに、とにかく前記報告書の図形とは全く異なるものになってしまった。この事実をどう解釈するか。下山してからKさんに、妙見山城などのことを聞く中で、この山一帯を妙見ともいう話があり、この山を麓から見ると頂上が二つあり、一見、別の山にみえるが、城跡はこの二つの山の頂上にまたがっており、更に、この山城を妙見山城ともいう人もいることなどが分かった。これらを総合すると、報告書にある「狐城」は東側の頂を言っているのかもしれないと気が付いた。そう思ってみると報告書にあるこの二つの城を東西に並べると、まんざら似ていないこともなく見える。更に、日本城郭大系によれば狐城について「本城は西から東へ向かって、五段の郭が設けられている」とあり、別名「七つ井の城」とある。地元でも良く分からないが、七つの城があったといわれていると言う人もあり、更に、城郭大系には「妙見山城」は見当たらない。

これらのことから、本来一つの城として機能した狐城（妙見山城）が、山頂が二つに別れており、山の呼称も色々あり、調査に当たって別城と見て調査したのではないかと思われる。「この城は二つだが城は一つだ。だから、狐城と言うのだ」と、丸で落語のネタのような話もあるらしい。勿論、この度の調査は雨の中で何の準備もなく、目測、歩測による杜撰なものであり、調査漏れ、見誤り判断間違いも多々あると思うが、二日にわたり、しかも、雨の中で狐城にふりまわされた思い出の一助にと駄文にまとめた。志ある人はさらに狐の本性をたしかめられてはいかがだろうか。

（参加者　出内博都、黒木日出人、小林浩二、坂本敏夫、佐藤錦士）

広島県中世城館遺跡総合調査報告書（抜粋）

【妙見山城跡】

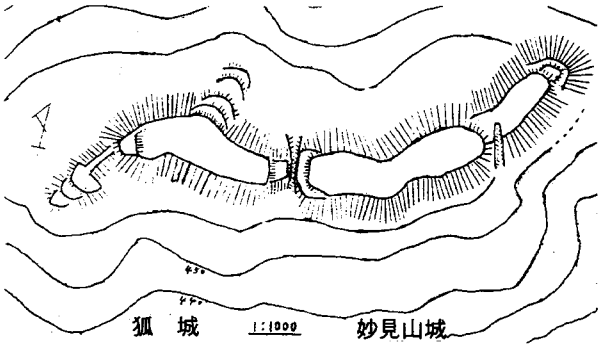
・世羅郡世羅西町神崎
・現状　山林　・保存状況　完存
・立地　丘陵部頂　・標高460m
・比高110m
・概要

最高所の1郭の北西端には古墳があるとされているが、これは土塁の可能性がある。この北側には深さ12mの堀切があり、その北側には2・3・4郭を配す。4郭の東側には竪堀がある。1郭の南側には深さ6mと2mの堀切がある。

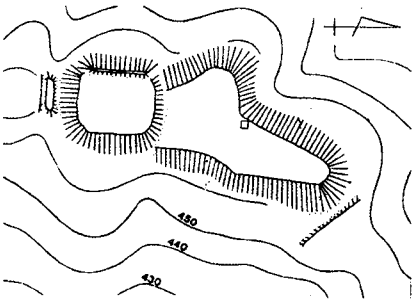
【狐城跡】

・世羅郡世羅西町神崎
・現状　山林　・保存状況　完存
・立地　丘陵部頂　・標高480m
・比高130m
・史料
『芸藩通志』巻103・108
・参考文献　『日本城郭大系』
・概要

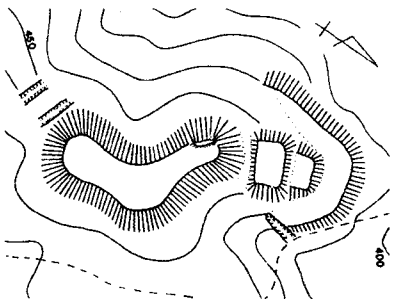
最高所の1郭の西側には土塁状の高まりがある。1郭の南には二条の堀切を配す。1郭北部には長大な2郭があり、その中央部西端に祠跡がある。2郭の北東尾根続きは1条の堀切によって分断している。



城郭研究部会縄張り図（1998．7．26）　1：2000



広島県中世城館遺跡総合調査報告書．
狐　城　1：2500



広島県中世城館遺跡総合調査報告書．
妙見山城　1：2500

いま蘇る紫香楽宮

柿本 光明

信楽（しがらき）には、二回か三回訪れた。今年の三月に大阪で会合があり、友人三人と再訪したのだが、来るたびに町は変わっている。

信楽町は滋賀県の南端に位置し、昭和二九年九月に旧信楽町と雲井村・朝宮村・多羅村の一町三村が合体して誕生した。

町の周囲は海抜五〇〇～七〇〇メートルの山々に囲まれ、山地帯が広い面積を占めるが、北西へ流出する大戸川の本・支流沿いには、盆地状の低地がひらけている。

この辺りは風景も非常によいが、わが国でも有数の良質陶土の産地で、平安時代から陶器作りが行われ、信楽焼は茶器の代名詞となったほどである。現在も食器・花器・庭園陶器をはじめ、ユーモラスな縁起物のタヌキの置物などが焼かれ移出されている。町の南西部の朝宮地区を中心とした茶栽培もさかんで、これも平安時代に始まるといわれていて古い伝統をもち、かつては新茶を皇室に献納する習わしであった。

見どころとしては紫香楽宮跡、飯道神社、多羅尾代官所跡などがある。

飯道神社は町の北東端、飯道山の頂上近くにあり、『延喜式神名帳』にも名を残す古社で、修験道の霊場として、奈良時代に開基の飯道寺とともに栄えたが、明治初年の神仏分離で、飯道寺は廃され、神社だけが残された。本殿は国指定の重要文化財で、桁行二間、梁間三間、一重、入母屋造り、桧皮葺き。正面に千鳥破風と軒唐破風を付けている。擬宝珠に慶安三年の銘があるが、組物は安土桃山時代の様式を示している。

聖武天皇や光明皇后といえば、知らない人はないだろう。政争うずまく奈良時代、豪華に花ひらいた天平文化を代表する天皇と皇后である。その聖武天皇は、生涯に奈良東大寺の大仏や諸国の国分寺とともに、平城京の外に三つの都をつくった。難波京、恭仁京、紫香楽宮である。大仏造顕の大事業は、そもそも信楽に建立された「甲賀寺」で始められたもので、紫香楽宮が信楽町にあったことはいうまでもなく、信楽の町は天平時代の政治・宗教・文化など重要な位置にあったものと思われる。

紫香楽宮とは、近江国甲賀郡にあった聖武天皇の皇居。信楽宮とも書き、また甲賀宮ともいう。天平十四年（七四二）天皇はここに離宮を造営し、当時都のあった山背国の恭仁宮（京都府相楽郡加茂町）からしばしば行幸された。同十五年十月、この地において盧舎那仏（るしゃなぶつ）造立の詔を発し、大仏の寺地を開いた。同十六年二月の難波遷都後も天皇は紫香楽にあって大仏造立事業に専心され、同年十一月には甲賀寺に盧舎那仏の体骨柱を建て、みずからその縄を引かれたという。同月元正太上天皇も難波からこの紫香楽にこられ、ここに事実上、紫香楽が皇都の地となった。同十七年正月条の『続日本紀』には「乍遷新京伐山開地以造宮室」とある。

しかし、このころから、紫香楽で大仏造立に対する貴族・僧侶らの反感が高まったらしく、宮の周囲の山々には放火とみられる火災が頻発し、地震もおこって不穏な情勢となったため、天皇は平城遷都を決し、同年五月、平城京に帰還された。

この間、宮周囲の山の火が絶えず、宮内は荒廃して盗賊が横行したため諸司や衛士に命じて官物を納めさせたといい、急速に荒廃したことがうかがわれる。

文献によれば、朱雀門や大安殿など宮の中心部は完成していた。現在信楽町黄瀬の通称内裏町に宮跡があり、史跡に指定されている。礎石が広く分布し、瓦を出土するが、礎石の配置は金堂・講堂・中門・回廊・塔院・僧房など寺院の伽藍式のようにも見える。これを天平勝宝三年十二月の『奴婢見来帳』に載っている甲賀国分寺とし、紫香楽宮が廃された後、近江国分寺として施入されたものとみる見方もある。近年、信楽町では「宮町遺跡」をはじめとして、発掘調査がずいぶん進んできてその結果、古代史の重要な史料である「木簡」が多数出土し、奈良時代の建物跡なども見つかっている。こうした基本史料にもとづき、紫香楽宮開都一二五〇有余年の古代史について関心を染めた。

天平十二年（七四〇）九月九州全体を統括する役所である太宰府の少弐（次官）の藤原広嗣が反乱を起こした。これより三年前の天平九年には天然痘が大流行し、藤原不比等の子たち（武智麻呂、房前、宇合、麻呂）がそろって急死してしまった。

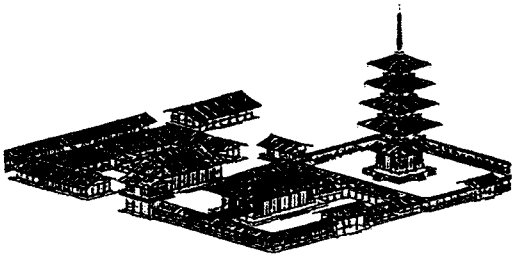
陰謀によって長屋王を打倒した藤原四子政権はあっけなく崩壊し、かわって橘諸兄が政権をにぎって、反藤原的政策を打ち出したため、藤原氏は苦境に追い込まれ、こうしたときに藤原広嗣が巻き返しに打って出たのがこの大反乱である。

急報をうけた聖武天皇はおおいに

驚き、十月下旬、まだ反乱が続いているさなかに、平城京を抜け出し伊勢に行幸され、以後約五年間にもおよぶ天皇と都の移動がはじまった。広嗣の一派が平城京で騒ぎを起こすのをさけるためとも思われるが、三重県一志郡白河町川口付近でしばらく滞在されているとき、広嗣逮捕、ついで死刑の報告が届き、行幸にしたがって来た人々の多くはこれで平城京にもどれると思っていたが、聖武天皇は反対に伊勢湾岸にそって濃尾平野を北上、関ヶ原をへて近江に入り、湖東平野を南下するという旅を続けたのである。そしてその途中で、突然「恭仁京」を新たに造営して平城京から遷都する、と驚くべき方針が示された。これは右大臣の橘諸兄のすすめに天皇が応じたものと思われる。前述のとおり、恭仁京の造営が精力的に進められたことは、変わりはないが、天平四年二月に恭仁京から近江国甲賀に通ずる道路（恭仁京の東北道）の建設が命ぜられ、ついで八月十一日天皇は「紫香楽村」に行幸するという詔を出し、「造離宮司」を任命された。

このとき任命されたのは、恭仁京造営のためにおかれた造宮省の長官と次官で、離宮の造営に造宮省の首脳陣があてられるのは異例のことである。紫香楽宮の造営には、はじめから力を入れておられ、恭仁京の造営と関係を持って進められていたことがうかがえる。

天平十六年十一月十七日元正太上天皇が難波宮から紫香楽宮に移られたことは政治的緊張の緩和を意味したと考えられる。これによって紫香楽宮を都とする条件がようやく整い、天平十七年元旦には紫香楽宮は「新京」と呼ばれ、大楯と槍が立てられた。これによって、やっと紫香楽宮が皇都であることが公示されたわけである。その後、天平勝宝三年ごろまでは近江国分寺となり、最後は火災で焼失したものとみられる。



紫香楽宮復元図

母の勲章

後藤匡史

私の母は、明治四十年一月三日生まれ、当年九十一歳である。今は亡き父は、亭主関白の代表者のような人だった。

母は、なんでも父を立て、何しろ我が家では、皆んな父を「お父さん」、母を「母ちゃん」といっていたが、しかし、母の不平を聞いたことが無かった。よく腹を立てる父に母は額縁に孫の写真を入れておき、腹が立ったらこの写真と書いてあった。

十九歳で嫁いで来て、祖母よりも祖父に料理を習い、実際、祖父は大分の老舗・春日亭（往年の声楽家立川清人氏の実家）が忙しい時は加勢にいっていたと聞いたことがある。

だから父の自慢は、おシナの作った料理は一流じゃ、何しろ爺さんから習っているじゃけんと。

それから祖母は映画（当時、活動写真）が好きで、着物の袂に割引券を入れておき、裏木戸からこっそりと映画見物にいっていたと、よく姉が話していた。

また、母は若い頃より呉服屋の着物、布団の縫い物仕事をしていたので、今でも、その頃のことを思い出す。何アールかの布にヘラで印をつけて今度はハサミで切ると言うより裂くが如く、針仕事ともなると、まるで人間ミシン。この所、女性も働く時代と言って家庭をおろそかにする傾向がままあるが、ハタラクとは端を楽にすることである。つまり傍にいる人は夫であり、子供。以前は、母親はお父さんが働いて給料を持って帰るから、父親は母さんが御飯を炊いて食べさせてくれるからと、夫婦の相互理解があった。

私はいつも子供に、父親の実直さと母親の寛容さを言って聞かせている。母は、歌手は五木ひろし、野球は巨人の大ファンである。

この度、平成十年三月、大分市社会福祉センター民謡同好会より只一人表彰された。雨の日も、風の日も休まずとのことである。

明治女性の真骨頂ここにあり。

合掌。

【『古事記』を読む】

日　時　十一月二十日（土）

★日程変更注意！　午後二時

主　催　歴史民俗研究部会

場　所　中央公民館会議室

資料代　一〇〇円程度

二十一世紀の星

石井 しおり

この七月、七夕の宵にきらめき始めた星を数えながら、今、アジアで否、二十一世紀の世界に向かって輝き始めた星、チョン・ミュンフンが指揮する演奏会がある倉敷市へと急ぐ。管弦楽団は、ローマ・サンタチェチーリア国立アカデミーである。

かねてより彼の提唱する「アジア・フィルハーモニー・心に訴える音楽を目指す」という音楽に触れたいと切望していたからである。

演奏は、まず、ロッシーニの「セビリアの理髪師序曲」から始まった。

指揮台の上に、東洋の仏像の如く仁王立ちになった彼のタクトが一閃するや、百名近いオーケストラはその一撃のもとに雷鳴のような音が束となって興り、うねり、はたまた静かなさざなみとなって、透明な美しい歌を奏でる。

まるで天からほとばしり、溢れるような音の流れが管弦楽器を通して響いている。

続いてメンデルスゾーンの「交響曲第四番イタリア」でクライマックスを迎え、ブラームスの「交響曲第一番ハ短調」でフィナーレとなった。

聴衆は衝き動かされ、呆然とし、やがて鳴り止まぬ拍手喝采で応える。

左腕の打撲で痛さに耐えかね通院している私が、われを忘れて掌が熱くなる程、拍手を繰り返していた。

この共感と声援の情景に、チョン氏は日本語で「ありがとうございます」と熱ぼく挨拶を送っていた。

止まることなく続く喝采に、指揮者は団員を起立させ、一二三と掛け声をかけたところ、何か一斉にイタリー語らしい発声があった。恐らく「皆さん、ありがとう」ということだったのであろう。座席は波打ち、舞台上の人達も頬が紅潮して、笑顔がつぎつぎに移って行く。

再度盛り上がる熱い拍手は、遂に観客を総立ちにさせ、舞台上では、オケのメンバーが靴で床を鳴らしてそれに和している。

長い長い拍手の嵐に、チョン氏は舞台のソデから何回引っぱり出されたことか。おしまいには、ステージに詰め寄った大勢の人達の尊敬をこめて差出す両手の波に、高揚した面持ちで握手に応じていた。

指揮者もオーケストラも聴衆も、人間として向き合い、共に音楽を堪能し合ったという充足感は、何という素晴らしい黄金のひとときであろうか。

本当に人々を感動させる音楽、チョン氏を求心力とする共感の坩堝(るつぼ)。オーケストラのひとりひとりが、この指揮者の為に全力を尽くそうという境地まで高める、チョン氏のカリスマ性について改めて考えさせられた。

彼は、韓国から八歳の時アメリカに移住し、ピアノ部門で〝チャイコフスキーコンクール〟において二位に入選。やがてその頃から指揮法も学び、ヨーロッパに居を移してからは、ドイツ、パリ、イタリー等で圧倒的な存在感を示しつつ、現在に至っているという。

これほどのカリスマ性とリーダーシップは、指揮者と楽団員との深い人間関係と、お互いに気持ちを通わせているという辺りに起因するものであろうか。

人生の大半を西洋で過した彼に、その佇まいからアジアの香りをほのぼのと感じずにはいられなかった。

音楽の底辺に、東洋のアイデンティティを深く内臓しながら、世界の人々に問いかける〝共感の音楽〟。

私は、同じアジア人として、彼が醸(かも)し出す旋律に深く感動し、今後一層の活躍を心から願っている。

そしていつまでもその活躍を楽しみにしている者の中の一人でいたいと思っている。

二十一世紀の星よ、アジアの空にきらめきてあれ。

平成十年七月七日夜

『山城志』第一六集の原稿募集

原稿最終締め切り

十二月三一日(木)年内到着分まで

原稿は原則として一人一本。内容審査の上採否を決定します。投稿されても掲載できない場合がありますので予めご了承下さい。

版形はB五サイズで、縦書き二段組です。ただし、一覧表などは横書きでもかまいません。

本文はタイトルページを除けば、「三二字×二二行×二段」でちょうど一ページ。ワープロ原稿の方はこれに字数を設定してください。

四〇〇字詰原稿用紙ですと約三枚半にあたります。掲載ページ数は最大二〇ページ（四〇〇字詰原稿用紙七〇枚）まで。

写真・図版も掲載可ですが、費用が余分にかかりますので、枚数は常識の範囲でお願いします。皆様の力作を期待しております。

「ハハキ」と「籠り」雑感

門田 幸男

平田さんに奨められて『黄泉の国の考古学』を買った。遺物と並んで古事記神話を題材にされているので親しみ易い。梅原猛という先生がいる。歌人の斎藤茂吉さんが、柿本人麿を六位以下の木っ葉役人だといったのが定説となっていたのを打ち破った人で尊敬していた。しかし、アマテラスが天石屋戸に隠れたと訳しているので失望していたが（隠れて出て来たのでは何の変化も期待できない）、辰巳先生は籠ると隠れるとは違うといっている。至極同感である。ヒルメという巫女が神と交歓して（ホトを突くで暗示）その精を受けて籠りの後に、アマテラスという日の神になって産まれた。実際問題として神の子を産むことは出来ないから籠りという疑似妊娠期間（吉野民俗学）を経て、自らが神となったと考えられる。辰巳先生も吉野先生の本を読んでおられるようだが、籠りの理解の仕方が少し違う。考古学と民俗学の差であろうか。

天若日子の葬儀で喪屋が登場する。喪屋という疑似母胎に着床するためには、男女の性の結合が必要だ。疑似男性性器がハハキであり、女性器がキサリだと吉野先生は考える。オオムナチが死んだ時、キサカイヒメとウムガイヒメとが登場した。貝は女性器を想像させるが、貝殻まで相似の子安貝の事だろうと推理されている（祭りの原理）。喪屋は疑似母胎であり、モガリは疑似妊娠期間である。昔、人は現実に目に見える事を基準にして考え、死んだ時はアノ世へ産まれ出る（逆方向の出生）と思ったのではあるまいか。

モガリという言葉は、身離れのなまりだろうという。肉体が脱落して白骨化するのを待つわけだ（乾れ・枯れと同根。ワカレはここからでた。岩波古語辞典）。辰巳先生は籠った場所の霊力が身に付くのだろうといっているが、私は吉野先生の疑似妊娠説の方がしっくりすると思う。常世から人の種がやってくる（沖縄の出生思想）。男女の交わりによって母胎に定着し十ヶ月間の籠りの後に誕生する。正方向の疑似母胎が産屋で、負の方向が喪屋である。中西進という先生（辰巳先生の本にも出る）の本でアジスキタカヒコネが壊すために喪屋を作ったのだと書いている（『古事記を読む2』）。無責任な「学者の放言」という外はない。古代の事は闇の中であるから推理する外はないのだが、無責任な先生もいるのですねぇ。時代と場所とを問わず、人がすることにはみんな理由があり、願望がある。産まれた時には無事に育てよと祈り、死んだ時には迷わず成仏（アノ世へ定着する）しろよという願望の下に行動しているのであって、筋書き上必要だから作ったなんて誰にも納得できない話だ。

疑似母胎にこ籠って産まれ変われば元の状態からは、全く別の見違えるように変身（巫女は神になり、老人は若返り、死人は浄化して霊魂のみに）する。だから産屋で呪物の蟹（脱皮する）をはわす（古語拾遺）のだが、ハハキで蟹を掃うと書いてあるので、ハハキは掃除道具だと誤解されるに至ったのである。ハハキは掃う道具としてよく似合った形だが、本来は立てるもの（玉箒、オハケ等）だから、箒を逆さに立てる呪いが行われていた訳である。産まれ変わって神に成るのは、アマテラスに限らない。疑似母胎の仮屋に籠って神事に奉仕する金比羅宮のお頭人様（男女児各二名・新生児だから大人で産まれる事は有り得ない）も小児だから、具体的仕事はなく、存在すればよいと見られている。この祝舎と呼ぶ仮屋にも男根象徴物と見られるオハケ（ハハキの別名）が密着して立ててあり、疑似母胎説の裏付けになると私は考える。

辰巳（良い名前ですね）先生の本は考古学の本だから、黄泉の国がどこかとは考えられているが、どうやって行くのかについては吉野民俗学の方が分かり易いと私は感じている。話は変わって、晴れの反対語は褻だといわれているが、これはおかしい。太陽が出ている時が晴れで、かくれている時は曇りだ。人間生活では籠り（曇りと同じ事で姿は見せない）の反対が晴れである。褻の字には衣がついているから、褻は普段着の事であって晴れ着には対応出来るが、籠りと晴れという人間の変身行為とは無関係な語であると私は考える。僭越な発言だが、学者や辞典が百パーセント正しく、間違いが無いとはいえない、と私は思うのだが、先輩諸兄の御批判を賜わりたい。

【『古城記』を読む】

日　時　十一月二十日（土）午後七時

主　催　城郭研究部会

場　所　中央公民館会議室

資料代　一〇〇円程度

私がおすすめする本

佐藤壽夫

『もうひとりの写楽』

河出書房新社刊
李寧熙（イヨンヒ）著

文献によると、江戸後期に突然、現われ、十ヶ月間に百四十数枚の浮世絵を描き、どこへともなく消えた絵師、東州齋写楽（とうしゅうさいしゃらく）とは何者か？

本名不詳　出身地不詳
生没年不詳　経歴不詳
父母兄弟妻子すべて不詳
後年の消息もまた一切不詳
不詳だらけである。

茫漠（ぼうばく）とした二、三世紀の人でもなく、わずか二百年前の有名画家の事情がなぜこれ程、闇に包まれているのだろうか。このこと自体がむしろ謎である。

当時、写楽の評価は決して高いものではなかった。

現在その作品が地位を得たのは、ドイツ人クルト博士の功績が大きいという。

春信・清長・歌磨・北斎・広重と共に、六浮世絵師の一人写楽。

写楽の実態を明かすのは、李女子。江戸時代（当時、一七九六年頃）の十返舎一九（じゅっぺんしゃいっく）の「初登山手習方帖（しょとうざんてならいかたじょう）」という文献を解読して、写楽の驚くべき実態を披露する本。

ずばり李先生は、東州齋写楽は、当時、日本にやってきた朝鮮通信使の一員、金弘道（キムホンドン）その人であると喝破せられる。

私は十年前から、李先生の「記紀・万葉集の解読講座」を勉強している。特に古事記や日本書紀に収録されている上代歌謡の解読に大変興味を持ち学んでいる。

たとえば、神武天皇が八咫烏（やたがらす）の案内のもとに反対派の兄宇迦斯（えうかし）を討った後、詠んだ戦勝歌の一句である、「ああ、しやごしや〔ああ、しやこしや）とも〕……」

古事記に登場する、この摩訶不思議な言葉は、万葉仮名で「阿阿志夜胡志夜」と記されている。

これはいったいなんという意味の言葉であるのか、日本人は、おそらくごくわずかしか意味を理解することができないのではなかろうかと、李先生は話しておられる。

そう、この言葉は、古代朝鮮語で語った言葉を、万葉仮名に書き表しているから日本人には意味が理解できないのだ。

古事記の本文には「阿阿志夜胡志夜」と表記し「阿阿」の下に音引と書いてあり、続いて「志夜胡志夜」と書いてある。

さて、皆さんはなんと読まれるだろうか。

このたび、河出書房新社から刊行された「もうひとりの写楽」李寧熙（イヨンヒ）著を一読してみてはいかがだろうか。

謎に満ちた写楽の人物像がくっきりと浮かびあがってくるだけでなく、「ああ、しやごしや」の意味も理解できる。

日韓文化の足跡を知るためにぜひご一読あれ。

会報の原稿募集

「備陽史探訪」第八六号の原稿を募集します。

タイトル・氏名別で、本文縦書き一六×（四〇〇字詰原稿用紙の場合下四字を空けて使用。厳守）二四〇行以内で書いて下さい。写真を含めても、できれば二ページ以内（但し会からの依頼原稿は例外）でお願いします。

締切は十一月十五日（土）、原稿は事務局まで郵送して下さい。

吉備磐座紀行Ⅱ

昨年に引き続き、歴民研の主催で吉備磐座紀行パートⅡを実施します。

主な探訪予定地は熊山遺跡（赤磐郡熊山町）、加三方遺跡（和気郡佐伯町）、石村神社（赤磐郡吉井町）、石上布都御魂神社（赤磐郡吉井町）、天石門別神社（英田郡英田町）などです。

神社や祭祀遺跡に興味がある方はぜひご参加下さい。

【実施要項】

《日程》十一月二二日（日）
★雨天の場合は二三日（祝）に順延。
《集合時刻》午前六時四五分
《集合場所》福山駅北口「福山キャッスルホテル前」
《募集数》限定一二名（先着順）
《参加費》実費（三〇〇〇円程度）
★会員のクルマに分乗。クルマを出してくださった会員は無料。ガソリン代・高速代を分乗した他の三人で分担。資料代を含みます。
《その他》弁当・飲物各自持参。歩きやすい服と靴でご参加ください。
《受付》平田副部会長宅まで。（☎〇八四九―二二―三七八一）
《受付期間》十一月九日（月）～一二日（水）午後九時～一〇時（時間厳守）

母の形見から

種本　実

六月に彼岸の人となった母の形見のうち、ダンボール箱にぎっしりと詰まっていた大学ノートに記された日記には驚いた。いつからのものかさえ未だわからない。これから時間を掛けて、じっくりと目を通すのが愚息の務めだと思って盆休みの宿題にしている。

他に、若き日の白黒写真には戦時中の緊迫した表情が伺える。結婚記念だろうか、立ち姿の父に寄り添って椅子に座った和服姿の母、二人があまりに若々しくて、別人のように見える。暗雲の世相だったにせよ、夢と希望に満ちた夫婦であったろうにと、今は亡き父母がいとおしい。

それらにも増して、手が震える思いであったのは、満州開拓団の一員として、渡海した二人に内地の肉親から届いた封書の束だった。それは、いかにも年代を感じさせる、骨董品の角型のバックに大切に保管されていた。バッグはそれまでにも眼にしたことがあったが、開けてみたのは母が死去してからだった。嗚呼、なぜ、もっと早く中を確認しなかったのかと悔やまれてならない。

封書の表の住所は、「満州国北安省拜泉縣三道鎮備南開拓団種本秀子殿」と記されている。北安省とはどの辺りだろうか。図書館で開拓団関係の本を紹介してもらい調べると、満州の北東部だった。こんな奥地まで、乗り物に弱い母がどうやってたどりついたのだろうか。

今は亡き伯母からの便りが最も多い。色あせた便箋の最後には「北満の秀子様へ」とある。満州でどんな作物を作っているのか、乗馬姿の写真が出来たら送って欲しい、内地は砂糖などが配給となったなどと、かすれかけたインクの文字がやっと読める。母の父からの手紙では、○○さん（父）が召集されて淋しかろうけれど東亜の建設のため頑張るようにとか、その後の便りでは、一旦、内地に帰ってみてはどうかなどと、濃い筆跡が今でもしっかり読める。この封書類を、先日叔母に見てもらったら、良く保存していたものだと感心していた。「久しぶりにお父さんの字を見た」と懐かしそうでもあった。几帳面であった母の人柄を改めて知る思いだった。

バッグにはこの他、昭和十九年に広島の鶴羽根神社での、拓士合同結婚式でいただいた誓詞、この中には「……進んで満州開拓の聖業に励むことを誓い奉る」との文が眼をひいた。更に、比婆郡庄原町にあった広島縣女子開拓訓練所発行の修了証書、小冊子「戦陣訓」、母の父の名が記されている軍隊手帳等々、歴史を証言するものが次ぎ次ぎと出てきた。

戦陣訓の第一項には、「本書ヲ戦陣道徳昂揚ノ資に供スベシ、昭和十八年一月八日　陸軍大臣東条英樹」

とあり、序に続く本訓其の一には「第一　皇　国　大日本は皇国なり萬世一系の天皇上に在しまし。」で始まっている。

軍隊手帳の勅諭のうち、巻頭の明治十五年一月四日付けのものは、わが国の軍隊は天皇によって代々統率され、其の起こりは二千五百有余年前の神武天皇に始まるという趣旨で始まっている。大正元年、大正三年に続く昭和元年の勅諭では、「…朕祖宗の威霊ニ頼リ萬世一系ノ大統ヲ嗣クニ臨ミ朕ガ股肱タル陸海軍人ニ告ク」と、以下帝国軍人としての心構えが記されている。

更に、「讀法」として、「兵隊ハ皇威ヲ発揚シ国家ヲ保護スル為メニ設ケ置カルルモノナレハ此兵員ニ加ル者ハ堅ク左記ノ條件ヲ守リ違背スヘカラス」として、第一條から七條まである。その後には軍人としての経歴が自筆で克明に記されてあった。

なぜ母の父だった人の軍人手帳（おそらく「戦陣訓」もそうだろう）があるのかいぶかしかったけれど、半世紀以上経て今、私の手許に残ったという事実を重視したい。ずっと昔から、折に触れて母は、自分の父が近衛兵であったことを誇らしげに私に聞かせていた。「皇居を警備する近衛兵は、誰でも採用されていないのだ」と。

母が満州の大地を耕していたのは昭和十九年の春から秋までの半年くらいだったらしい。父の母が、母の父と相談して母を内地へ連れ戻したことが、幸運にもその後の惨禍に遭遇することなく、従って現在の私達三人の子が生まれたのだ。

福山市北部図書館で偶然目にした『広島県満州開拓史上・下巻（発行・編集　広島県民の中国東北地区開拓史編纂委員会）』に開拓団の詳細が綴ってあり、「備南開拓団」の項の団員名簿に、わが父母の名を発見したときは、思わず目を見開いた。公の記録にも記されていたのだ…。

満州への開拓移民が始まったのは満州事変によって満州国が立国した昭和七年である。広島県の場合は昭和十八年、十九年と戦争末期に多くの農民が送出されているのが特徴で

ある。彼の地で終戦の混乱に遭遇された方々の、悲惨な体験はいかばかりだったことだろう。備南開拓団は福山、尾道、三原など備南地方の中小商工業者が中心となって、大陸帰農開拓団を結成したことに端を発している。この背景には、戦争の長期化がもたらした、物価統制、物資の配給制による企業整備に対処した、商工会議所による廃業した人々への転廃業対策があった。

昭和十八年三月二十日、先遣隊三十三人が福山市役所で壮行式を行い渡満したが、この中には後に軍に召集された父もいたようだ。

今では殆ど見られないが、あの名作「人間の条件」など、かつてテレビ映画で戦争ものが放映されると、父は画面に食い入るように向かい合っていた。懐かしいのだ、と言い眼を細めながら。母はまた、『満州国最後の日』『一億人の昭和史　空襲・敗戦・引揚』などなど戦中・戦後の動乱の時代の記録写真集を数多く購入していた。眼を通しながら、自身の動乱の青春時代を振り返っていたのだろう。

父母は満州でどのような生活を送っていたのだろうか。現地住民との交流はあったのだろうか。生前中は全くそんな話を聞けなかった。

代わりに、母の初盆に御参りして下さった親戚の人たちにいろいろ尋ねて、興味深い話をいくつか聞けた。「お母さんは、昔の苦労話は思い出したくなかったのだろう」と、伯母は私を諭すように言った。「満州は寒かろうと米を売り、その金で布団を送ったが届かなかった」とは叔父から、「近衛兵だった祖父は、二・二六事件の時、反乱軍の鎮圧に功があって銀杯を賜り、その家宝を数年前に叔父から見せてもらった」とはこれも初めて聞く従兄弟の、琴線が振動する話。

もし、もっと早くこの古いバッグに詰まっている手紙類を眼にしていたなら、若き日の大陸での希有な体験を、両親からむさぼって聞き取っていただろうにと、そんなやるせない思いで、時折押し入れを開けては母の分身である古いバッグを開けている。「昭和は遠くなりにけり」、母の言葉を反芻しながら……。

平成十年八月十五日　記

私のこの一冊（平田恵彦さん推薦）

『呪術と占星の戦国史』

小和田哲男著　新潮社刊

戦国時代は「呪術が歴史を動かした時代」とまで著者がいい切ったのには驚いた。目から鱗が落ちる本。

新入会員紹介

前回の会報以後、次の方々が入会されましたのでご紹介いたします。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

十二月度徒歩例会

初冬の服部谷に中世の面影を訪ねる

十二月の徒歩例会は、田口会長のご案内で服部谷に土肥実平や宮氏の面影を訪ねます。中世ファンの皆様振るってご参加下さい。

《主な探訪予定地》

○泉山城
初代の備後守護土肥実平の築城と伝える土居形式の山城跡。室町時代には宮氏の一族が居城とした。

○椋山城（市史跡）
土肥実平の末裔と伝えられる桑原氏の居城。郭跡、空堀、井戸跡が残る。

○新山城
椋山城の支城の一つ、法成寺城とともに服部谷の出口を監視する。郭跡を留める。

○大迫金環塚古塚（県史跡）
新山にある古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳。石室の全長は約一二mもあり、いわゆる巨石墳だ。

その他に市場廃寺、北塚古墳等を巡ります。参加要項は十一月の行事案内で発表します。お楽しみに！

出雲の古社を訪ねて

平川 寿水

この七月、昨年に続いて歴民研の友人四名で二回目の出雲の古社めぐりをしました。このたび訪れるのは三刀屋町の三屋神社・飯石神社、鹿島町の佐太神社が中心です。

今回の旅で私が最も興味があったのは、在野の歴史研究家、原田常治氏の著作（私が「私本原田古事記」と思っている『古代日本正史』『上代日本正史』）がどこまで信頼できるか、当の神社所在地にどれだけの資料があるのかということで、素人の私なりに納得できればいいと思い、出発しました。

三屋神社は三刀屋町役場の課長さんが案内してくださいました。神社の所在地は三刀屋町給下、国道五四線の西、松本古墳の北側です。ほんのわずかばかり付近の田畑より高いところで、それほど広い社域とはいえないまでも、ちょっとした境内です。本殿は大社造、拝殿は入母屋造銅板葺で、随神門があります。いずれも貞享二年（一六八五）の築造で、式内社です。

「参拝案内由緒略記」によれば、祭神は大己貴命で、風土記撰上当時は御門屋社と呼ばれて神祇官あり、と記されています。また、社号の由来ついては、所造天下大神大穴持命が八十神を出雲青垣の内に追い払われてここに宮居を定め、国家経営の端緒を開かれた、その後、神社を創建、神地と定め、神戸をおいて大神の宮御領を調進することになったので、大神の宮垣の御門とその神戸とに因んで帝屋代と名付けられたもの、さらに御門と神戸とを社号とした神社は全国に例を見ないことは特記に値する旨、記されています。

宝物として、延喜二年（九〇二）に再建された時の棟札が現存し、裏面に「大己貴尊の天下の惣廟の跡なり」の記載があります。稲田姫の手鏡、三十六歌仙の額もあるそうです。

神社の西南には松本一号古墳があります。昭和三十七年八月に発掘調査が行なわれ、その際の出土品は銅鏡（漢式六獣鏡）、ガラス玉、鉄器、刀子、甕（土師器で物入れ）等で、土器も多数出土したそうです。

原田説によれば、出雲王朝大国主神の居館がここにあり、素戔嗚尊の末子須勢理姫とここに住まわれたはずで、裏の前方後方墳は須勢理姫の墓に違いないということです。この古墳から出土した副葬品には男性のものと思えるものはなく、権力を持つ女性の墓と説かれています。

地元の郷土史家の方も主張されていますが、昔からこの神社を「一の宮さん」と呼んでおり、昭和初年までは「一宮村」という独立した村で、出雲に一宮の地名はここだけです。つまり、熊野大社や出雲大社があるのにもかかわらず、この土地の人々はここが出雲一宮だと思っていたということです。この事からも出雲王朝がここにあったのを大和王朝成立後「御門屋」の地名が「三刀屋」に「御門屋社」は「三屋神社」に変えられたという歴史的事実があったと考えられるのではないでしょうか。記紀は出雲王朝が実在したことを目立たぬよう歪曲し、大和王朝の正当性を主張しているように思えます。

次に飯石神社に参りました。三屋神社より南の方位、国道五四号線を東に横切って県道を南下、同じ三刀屋町多久和という所にあります。前に小川が流れていますが、あまり開けた場所とはいえない細長い境内です。広さは三屋神社の三分の一くらいでしょうか。村の鎮守さまくらいの規模です。

祭神は伊毘志都幣尊、拝殿はありますが、本殿はなく、すぐ後ろに磐座（巨岩）があって玉垣で囲われており、その背後は山になっていました。おそらく神体山でしょう。

社名は事代主神の別名、伊毘志都幣尊から取られたものです。この神の名を元に飯石郡の名称もあるくらいで、合併前は飯石村と呼ばれていたそうです。郡内最少の村名が郡を代表する名になるということは、伊毘志都幣尊の神格が相当なものとであったことを示唆しています。

事代主神はここに居館をおいて住んだといわれます。大国主神の子、事代主神が近くに居館を持っていたことには納得できます。時は同時か、また相違していたかはわかりませんが、大黒さんと恵比須さんが隣同士に住んでいたわけです。

出雲風土記の記録にあり、神社あり、古墳あり、伝承ありで、この二社については原田説に十分納得しました。また、地元の方々の伝承に対する情熱もひしひしと感じました。

さて、次は佐太神社へ。途中宍道湖の北岸を東進していると古曽志町の古墳公園が遠くに見え、その近くに許曽志神社があります。祭神は猿田彦命と天宇受売命。原田説によると、猿田彦の住居があった場所となっています。参道脇では狛犬と並んで、猿・鶏の石像が賑やかに迎えてくれました。許曽志神社の宮司さんからも色々と神社の由来や伝承も

詳しくお聞きしました。

ここから車で五分ほど北東に走ると佐太神社。宍道湖と日本海を結ぶ佐陀川の西、松江市と鹿島町の境近くです。境内はほとんど平地で、大変広く、すがすがしい感じを受けました。西に神南備山を背負った形で、本殿は一段高くなっています。

昔は苔むした木立ちもあったのかも知れませんが、今は広い駐車場があって整然としたところです。神南備山の麓に三殿並立の大社造（国重文）の社殿がどっしりと幅広く鎮座している様は壮観です。

出雲風土記が撰上された当時、祭神は佐太大神一柱であったらしいのですが、中世以降、正中殿に佐太大神・伊弉諾尊・伊弉冉尊・速玉之男命・事解男命、北殿には天照大神・瓊瓊杵命、南殿には素戔嗚尊、秘説四座の神々が祀られています。

由緒書によると、主祭神の佐太大神は世にいう猿田毘古大神で、その出生の伝承は出雲風土記に記されています。八月の特別歴史講演会で辰巳先生が話されましたので詳しくは書きませんが、枳佐加比売命が黄金の矢を射て佐太大神を産んだ際、加賀の潜戸（神崎）の内部が光り輝いたことから、この大神はこの地で日神として崇められていたのでしょう。

「社記古縁起」によれば、年中の祭祀は七十五度もあったといわれています。気になるのは「神在祭」で、正中殿の御祭神伊弉冉尊が神去りました旧暦十月に八百萬の神々が佐太に参集されるので、幟も立てず神楽もあげぬ厳粛な物忌みがなされることから、別名「お忌み祭」とも呼ばれています。また、この祭には神迎え神事・注連口神事・神等去出神事・船出神事・止神送り神事・柴刺神事などがあるので佐太神社は古来「神在社」ともいっています。

気がかりの一つは、出雲大社で行なわれている神事と大変よく似ている神事がここでも行なわれていることです。神社の創建がどちらが古いかは不明ですが、片方の慣習が真似られたのではないでしょうか。

二つ目は、佐太大神が何故、猿田毘古大神といわれるようになったのかということです。原田説によると、猿田彦が出雲の国譲りの後、今の鹿島町宮内に出雲政庁を置き、族長議会政治を行なったといいます。どうやらこのくだりは佐太神社の「神在神事」のことを基にして考えられたようです。しかし、佐太神社の宮司さんにお聞きしてもこの件について明快なご返事はありませんでした。宮司さんのお話の中でおもしろく聞いたのは蛇の話でした。

佐太の「龍蛇」といえば、広く人口に膾炙した奇瑞だそうです。それは毎年時を変えず神在りの浜、すなわち佐陀の浦辺（古浦海岸）に現われ、漁師さんによって当社に奉納される海蛇のことです。火難・水難を始め、一切の災厄を除去し、豊作・商売繁盛の願いを叶え、漁民を守護する霊物として信仰されています。

その海蛇は、沖縄方面から海流に乗って日本海に流れ着き、やや海水温の低い寒流にあって弱って浜に打ち上げられたものを採って奉納されるのです。昨今はイカ釣り漁船が日本海の沖合で集魚灯をつけて操業していると、海蛇が寄ってくるといいます。その時、腹の黄色部分が玉のように光って、旧暦十月になるとまさに海から神々が集まってくる感じがするそうです。古歌にも「出雲なる神在月のしるしとて龍蛇の上がる江積津の浜」とあります。

結局、佐太神社関係では原田説が納得できないままでした。

猿田彦については、九州・出雲・伊勢の古代史の舞台に登場し、近世になっては庚申の神、道祖神として方々で祀られる不思議な神格をもった神であり、その実体はますます掴み切れなくなってしまいました。

ただ二回の旅をしてわかったことは、出雲は古代から現在も連綿として引き継がれている「大いなる神々の国」だということでした。

古墳講座Ⅴ
発掘された日本列島98見学会

十一月の古墳講座Ⅴは「発掘された日本列島」98見学会を実施します。今年は倉吉博物館で開催。あわせて妻木晩田遺跡・長瀬高浜遺跡等の史跡も見学する予定です。

【実施要項】

《日程》十一月一日（日）
《集合時刻》午前六時四五分
《集合場所》福山駅北口「福山キャッスルホテル前」
《募集数》限定一二名（先着順）
《参加費》実費（四〇〇〇円程度）
★ただし入館料五〇〇円は各自負担。
★会員のクルマに分乗。クルマを出してくださった会員は無料。ガソリン代・高速代を分乗した他の三人で分担。
《その他》昼食は外食の予定。歩きやすい服と靴でご参加ください。
《受付》山口古墳部会長宅まで。（☎〇八四九―四五―六一七三）
《受付期間》十月二〇日（火）～二二日（木）午後八時～九時（時間厳守）

泉州堺の史跡めぐり

三好 勝芳

八月十日午前三時、国道二号線と一八二号線の交差点にあるセブンイレブンに集合した有志四人、磐座亭主人の案内で阪奈史跡めぐりに出発。山陽自動車道を一路東進、東の空が白み始めた頃、三木サービスエリアに到着、朝食をとった。池田から阪神高速に乗り換え南下。神社は朝早くても開いているので、まず住吉大社に参拝、六時三十分であった。

住吉大社は底筒男命・中筒男命・表筒男命・息長足姫命の四神を祀る大社で、本来は海の神様であるが、古来、産業・文化・外交・貿易の祖神と仰がれ、大阪市民から「住吉さん」と親しまれて厚い信仰がある。社殿は切妻造妻入り、四つの本殿から成り、大阪商人の経済力の象徴のような立派なものだが、朝が早過ぎ由緒書や御朱印などが貰えなかったのが少々残念であった。

住吉大社から細い路地を抜けて、忠臣蔵の大石内蔵助と主税、それに寺坂吉右衛門の墓がある一運寺に参る。早朝のせいか山門が閉じられていたので横の入口から境内に入り、内蔵助らの墓に参る。本堂から朝の読経の声が聞こえていた。

一運寺の門前から百メートルほど西に行くと、右に入る路地があり、その突き当たりに生根神社である。本殿は重要文化財に指定されている。桃山時代の一間社流造の建物で、豊臣秀頼の命により奉行の片桐且元によって建てられたと伝えられている。それほど大きな社殿ではないが、早朝から参拝者が一人また一人と切れ目なく続いていることは、商都大阪の人たちの信仰の厚さを見せつけられたようで印象的であった。生根神社から近くの後村上天皇の住吉行在所跡を訪ねて後、大和川を渡って泉州に入った。

堺は古くからの湊である。南北朝時代に南朝の九州への通路として重視された。室町幕府の明への貿易船の発着港として栄え、次第に三十六人の富商による自治を固めていった。町の周囲には土居川を掘り自営した。応仁の乱で京都から逃れた人たちによって文化が高められ、やがて鉄砲やキリスト教が伝えられてからは、日本で最も富んだ町になる。しかし、豊臣時代にその繁栄は大阪に奪われ、徳川初期に大和川の付け替えで港が浅くなり、次第に衰えていった。

大和川にほど近いあたりは第二次世界大戦の戦災を免れたため、江戸期を偲ばせる古い町並が多く残されている。クルマがやっと入るような狭い道路が碁盤の目のように整然と並んでいる町並は印象的だが、道路がすべて一方通行なので、通り一つ間違うと大回りになってしまい、初めての訪れる人には不便である。

堺に入って最初に訪ねたのが旧鉄砲鍛冶屋敷（井上関右衛門家住宅）であった。現存する唯一の鉄砲鍛冶屋敷で、四棟の切妻造平入りの建物からなり、総間口は十二間半である。内部は非公開で、見ることは出来ないが、立札が屋敷前に立っており、詳しい説明がしてある。

堺銃で知られる鉄砲は、天文一二年（一五四三）にポルトガル人が種子島に伝えた火縄銃である。堺の北の庄といわれる一帯が鉄砲鍛冶の屋敷町であった。現存している井上家のほか、近くに榎並家・芝辻家の鉄砲鍛冶屋敷跡もある。

井上家から少し西に戻ってまた細い道の旧街へ入ると、チベット探検で有名な河口慧海の生家跡がある。現在は民家と民家にはさまれた狭い場所に石碑が立ってるだけである。慧海は日本のチベット仏教学を開き、『チベット旅行記』を残して明治の日本にチベットを紹介するなど、仏教界に対する数々の貢献は高く評価されている。

慧海の生家跡の後は三光山宝珠院を訪ねた。この寺は真言宗高野派の末寺で、境内には明治元年（一八六八）に起きた、フランス水兵と土佐藩士との衝突事件で責任をとって切腹した土佐十一烈士の墓がある。

宝珠院の真向かいに広普山妙国寺がある。妙国寺は永禄八年（一五六五）、摂河泉を支配した三好義賢から寺地とソテツの寄進を受け、堺の豪商油屋常言によって創建された日蓮宗の寺院である。樹齢数百年のソテツには数多くの伝説があるという。現在も本堂裏にその変わらぬ雄姿を見せている。三好義賢の墓もあることになっているが、ご住職が留守で、見つけることが出来なかった。

妙国寺からの阪堺電軌鉄道（チンチン電車）が道路の真中を通っている、通称「てくてくロード」という堺の歴史散歩道に出た。まず探し出すのに手間取った小西行長屋敷跡、それからザビエル公園（日比野了慶の屋敷跡）を訪れた。ほどよい広さの公園の片隅には「聖フランシスコ・ザヴィエル芳躅（善行のこと）」と書かれた銅板の碑が立っている。ザビエルが天文一五年（一五五〇）に山口から京都に向かう途中、ここに滞在し、キリスト教を伝導したと

されている。

サビエル公園から茶聖千利休の屋敷跡に向かった。ビルの谷間の芝生の中に利休が茶の湯に用いたという椿井が残っており、その井戸まで踏石が敷いてある。利休は法名を宗易といい、武野紹鷗に師事した後、わび茶を大成させたが、秀吉の怒りに触れて切腹させられた。かつてこの屋敷にあった実相庵という茶席は、南宗寺に再興されている。

大通りに戻って与謝野晶子の生家跡を訪ね、その後、開口神社を訪れた。この神社は塩土老翁神を主祭神とし、素戔嗚尊・生国魂命を配祀した延喜式内社で、堺の街の中心に位置している。海の神様ということから大阪の住吉さんと関係があり、堺では「大寺さん」と呼ばれて市民に親しまれている。ここには顕本寺で自刃した「三好元長戦死之地」の碑が立っている。現在の開口神社の社地は、古くは顕本寺の広大な境内の一部だったのである。

御朱印をもらった後、反正天皇陵（田出井山古墳）のすぐそばにある方違神社に向かった。この神社は天神地祇・素戔嗚尊・三筒男大神・息長足姫命の四座を祀っている。摂河泉三国の境で、東西南北の方位を殺し合う方祟りのない清地であることから厄除祈願で知られている。

方違宮を後にして堺市街で昼食をとり、午後最初の探訪地は常住山顕本寺である。この寺は宝徳三年（一四五一）堺の木屋、銛屋が自宅を寄進して法華堂を建て、日浄を開山とした。ここには室町時代末期に天下を狙った三好元長の墓と小歌の始祖高三隆達の墓がある。

御朱印をもらうため庫裏を訪ねたところ、不在のご住職に代わって坊守さんが出てこられた。話をしてみると、なんと坊守さんのお父上は福山市大門町野之浜の出で、ご住職も広島県府中市の出身であることがわかった。冷たいお茶をありがたくいただきながら仏縁というものを感じていた。

顕本寺から堺の旧街の南の端にある龍興山南宗寺を訪ねた。この寺の境内は堺で最も広く大寺である。三好長慶が建立し、弘治三年（一五五七）、大徳寺第九十世大林宗套を開山とし落慶。大阪夏の陣で焼失、元和三年（一六一七）沢庵和尚の尽力によって再建。境内には国指定名勝の枯山水の名園、武野紹鷗や千利休一門の供養塔、三好一族の供養塔、それに茶室実相庵などがある。また、家康がここで死んだという説もあり、東照宮が祀られている。

南宗寺の東隣に大安寺があり、国の重要文化財の狩野派の障壁画を見学しようと思ったのだが、本堂改修工事で拝観できなかった。一方、西隣には臨江寺がある。この寺は南宗寺の塔頭の一つで、今井兼続が菩提所として創建、今井家累代の墓が並んでいる。その片隅には武野紹鷗の墓もある。

これで堺旧街を後にし、郊外を和泉方面へ足を伸ばした。泉州一宮大鳥神社、景初三年の銘をもつ平縁の神獣鏡を出土した和泉黄金塚古墳、行基菩薩の生家跡に建てられた家原寺、信太の狐で有名な葛葉稲荷神社、その西方にある暦の神を祀る聖神社などを訪ねた。

この日の泉州堺の史跡めぐりは本当に充実した一日であった。当夜は富田林にある「かんぽの宿」に宿泊。大阪平野を西から東へと横断し、宿に着いたのは七時近かった。快い疲れの中で旅装を解いた。明日は再び河内・和泉の史跡をめぐる予定だ。一日中、終始、クルマの運転をしながら案内をした下さった磐座亭主人に心から感謝したい。

▲開口神社（堺市甲斐町東）
宿院駅の東、旧堺の中心山之口筋に位置する。
別名「おおてらさん」という。神仏習合時には
「大念仏寺」という寺でもあったからだ。

十一月度バス例会
三次市史跡探訪

十一月のバス例会は、城郭研究部会の担当で「三次市史跡探訪」と題して実施します。河霧の町として有名な三次市は、多数の史跡に彩られた町でもあります。今回は、その内から城跡を中心として熊野神社・鳳源寺等を廻ります。また、今回の例会では、最後に少し洒落た場所にも立ちよりますのでお楽しみに。

《募集要項》

○**日程**　平成十年十一月八日(日)
○**集合時刻**　午前七時四十五分
○**出発時刻**　午前八時　時間厳守！
○**集合場所**　福山駅北口
（福山キャッスルホテル前）
○**参加費**　会員三七〇〇円
一般四〇〇〇円
○**申し込み**　事務局へ電話で。
○**募集開始**　十月二十日（火）
午前九時より
○四〇分程度の登山がありますので歩きやすい服装で参加下さい。
○**弁当・飲み物持参**
※**天候・時間の都合により探訪地は変更・追加・省略する場合があります。**

《主な探訪予定地》

○**高杉城址（知波夜比古神社）**
土塁と堀を備えた館城です。元は城が立地する丘陵全体が城地と思われます。天文二十二年、毛利・大内両軍による江田旗返山城攻略の前哨戦で落城し城主祝甲斐守を始め一族は討死と言います。

○**比熊山城跡**
鎌倉時代以来三次郡一帯を支配した三吉氏が戦国末期に比叡尾（ひえび）山城から江の川・西城川・馬洗川の合流するこの地に移った山城跡で、県北有数の規模を誇り比高が一七〇mあり、登頂に四〇分程要しますが、登山道も危険な所はなく健康な方ならどなたでも登れます。

○**鳳源寺**
三次藩初代浅野長治が父長晟及び先祖代々の菩提を弔うため寛永十年に創建した寺院で、境内には赤穂藩主浅野長矩の室瑶泉院の遺髪塔、伝大石良雄手植え桜、漢学塾益習館を開いた藤田陶庵の碑等があり、境内裏の比熊山中腹には浅野長治の墓があります。

○**三次ワイナリー**
言わずと知れた今人気のワイナリー、ワインが飲めます。

事務局日誌

八月八日(土)
「『古事記』を読む」参加一八名。
終了後会報八四号発送作業。

八月二二日(土)
特別歴史講演会（第八回郷土史講座「他界は何処」開催。　講師は辰巳和弘先生。参加約一六〇名。すばらしい講演内容で辰巳ファン激増。於広島県立歴史博物館講堂。終了後、養老の瀧で慰労会を開催。

九月四日(土)
古墳講座Ⅴ「本郷町の巨石墳見学会」参加二二名。

九月一二日(土)
「『古事記』を読む」参加一五名。
終了後、七月度行事案内発送作業。

九月一九日(土)
「『備後古城記』を読む」参加一五名。

九月二〇日(日)
バス例会「津山盆地の古墳をめぐる」参加四一名。

九月二六日(土)
第九回郷土史講座「家庭内の神祭りについて」。
講師石井良枝さん。参加二四名。

九月二九日(火)
役員会開催。出席一二名。
※とくに断わりがない限り会場はすべて福山市中央公民館。

広島県立歴史博物館秋の企画展
戦国城下町
越前朝倉氏・一乗谷

今年度の県立歴史博物館秋の企画展は、戦国期の城下町遺跡として有名な越前朝倉氏の拠点・一乗谷からの発掘品展示です。
中世史に興味のある方々は是非お出かけ下さい。

【展示要項】
・**場所**　広島県立歴史博物館
・**日時**　十月三十日(金)
～十一月二十九日(日)
・**開館時間**　九時～十七時

編集後記

めっきり秋らしくなって来ました。秋は、読書に運動に食欲に何にでも合う季節です。深まり行く秋を楽しみましょう。（遵行使節沙弥）

備陽史探訪の会事務局　〒七二〇―〇八二四
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九(五三)六一五七